

日本のこころ④「徒然草」吉田兼好

1 ウォーミングアップ

- ①参道
- ②潮風
- ③傍観者的立ち位置
- ④気の利いた一句
- ⑤喪に服す
- ⑥親孝行
- ⑦丸太小屋
- ⑧非暴力不服従
- ⑨自分らしさを大切にする
- ⑩山門
- ⑪欄干
- ⑫セカンドライフ
- ⑬庵
- ⑭場数を踏む
- ⑮隣の芝生は青い
- ⑯舌先三寸
- ⑰厚顔無恥
- ⑱ツーカーの仲
- ⑲一を聞いて十を知る
- ⑳藍染め

2 翻訳

- ①狛犬の左右が真逆になっていて、「これは…何かあるに違いない。」と、涙ながらに感動していた高僧がだが、ピンとこない同行者たちに「この素晴らしさが分からないなんて…」と残念がるので、同行者もさも分かったかのような顔をする。

②高僧だと思われていたのが、ただの「ピント違いの考えすぎ」。まるでコントである。しかし兼好は高僧が「裸の王様」だと知っての保身か、付和雷同していた人たちの日和見的な態度もあぶりだしている。

③兼好は「こういうことってあるよね」とばかりに、大衆のやりがちな言動をあげき、突き放す。

④「竹林の七賢」は言論弾圧が横行した混乱期に、世を嘆いて竹林で琴を奏で、酒を飲みつつ、政治批判から老荘思想に基づく哲学談義まで、^{こうかくあわ}口角泡を飛ばし自由に語り合った。

⑤不老不死の薬を手に入れてしまったりしたら、逆にその瞬間瞬間の大切さがわからなくなってしまふ。永遠に変わらないものなんて何もないんだから、人生面白いのだ。

⑥満開の桜や充ち満ちた十五夜のように、100%のときだけがきれいなのか？雨が降っていても夜空を見上げて雨雲の向こうの月を思うのも想像力をかき立ててくれて、よいではないか。

⑦五分咲きは五分咲きで、数日後を想像できるし、葉桜でもつい数日前の姿が想像できる。そんな庭だってなんともいえないよさがあるではないか？

⑧変わらぬものなど何もないのなら、むしろその変化を愛でようではないか

(宿題はここまで)

3 通訳（受講日までご覧にならないでください。）

- ① 「名は体を表す」というが、鎌倉には「あじさい寺」、「苔寺」など、寺よりもそこに生息する植物の名のほうが、通りがいいものも少なくない。

- ② 寺の名前を考えると、学識を駆使してこだわりすぎた名前というのは、ユニークさも度を過ぎていたり、妙に奇をてらっていたりする。命名にあたっては素直さが一番。

- ③ 妻のほうから夫に「三行半」^{みくだりはん}を突き付けることができなかった時代に、北鎌倉の東慶寺には今でいうなら DV に耐えかねたご婦人方のシェルターがあった。

- ④ 社会が求める人間像よりも、自然な自分のあり方を模索したヒッピー同様、老荘を愛した隠者の兼好も、竹林を愛したはずだ。

- ⑤ 日本人は竹林に心癒やされるが、中国人は竹を曲げても決して折れず、反発してくるしたたかなものでもあると見る。

- ⑥ 京都の王朝文化を必死に学ぼうとするための金沢文庫に対する彼のまなざしも、「成り上がりの田舎者が勘違いして学問をやっている」という程度のことだった

⑦ 「金色の大仏」という絶対的存在さえも風化していくことを感じ取ったと同時に、日々変化してやまない、その変化自体を愛でるようになった

⑧ 初めて見たときにはこのアヴァンギャルドさに衝撃を受けるとともに戸惑った。しかし今なお見慣れない。

4 スピーチテーマ

①A 門前町 B レンタル浴衣店 C 法被

②A 鎌倉大仏 B 江ノ島 C 鎌倉幕府